

< 2014年度 第3回定期研究会 >

## 被災地で花とともに ～花セラピストとしての東日本大震災～

講演：大泉 淳子 (フォレストガーデン花とも代表)

日時：2014年10月18日(土)

2014年度第3回となる今回の定例研究会では、宮城県岩沼市から「花セラピスト」の大泉淳子氏においでいただいた。前半部分で大泉氏の東日本大震災における体験とご自身の活動についてご講演をいただき、後半部分では、参加者全員がフラワーアレンジメントを通じた「花セラピー」を実際に体験するワークショップ形式をとった。なお、このワークショップでは、大泉氏と同じく花セラピストである柄本梅子氏が佐世保から無償で駆けつけてくださり、生花の手配やワークショップの進行など、多方面でサポートをしていただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

大泉氏は東日本大震災の被災者である。ご実家は、岩沼市の沿岸部に10棟の温室や広い農地を持ち、カーネーションやスイートピーなどの花卉を中心に生産しながら造園も手がける大規模農家であった。敷地内には、先祖から伝わる貴重な文物を納めた堅牢な倉が建ち、大泉氏の父親である森勝廣氏は、シクラメン生産において先駆的な役割を果たしたという。

しかし、2011年3月11日の津波によって、家屋をはじめ、温室や農地は壊滅的な打撃を受けた。海水による塩害で農業生産は不可能となり、同年5月の開園を予定していた観光農園の計画も全て白紙となった。岩沼市の都市部で生花店を営んでいた大泉氏は、このような被災体験のみならず、震災直後には自身が大けがに見舞われることになるが、ある企業による仮設住宅への植栽ボランティアに参加したことをきっかけに、自ら行動を起こすことを決意する。

「マリーゴールドを見て、非常に私は感動してしまいました。何十年も花にたずさわってきたのに、『花ってこんなに力があるんだ』って、私はその時すごく痛感しました」

「『このままではいけないなあ』っていう、みんながそういう思い、『何かをしなくてはいけない』っていうそういう思いに、みんなが駆られていました」

東日本大震災は、福祉にかかわる様々な課題を投げかけてきたが、大泉氏は自身の活動を続ける中で、仮設住宅での暮らしが人びとの生活の「質」に支障を及ぼしていることに気づいていく。

「仮設に入っている皆さんは農家の方も多かったんですね。震災前は地域でいろんな活動をしていました。(震災後は地域の人びとが)『集まる機会がない』。そこで私のところへ来て『何でもいからやってちょうだい』」

「福島からお母さんと岩沼に来たんだけど、なかなか友達ができないし、仮設は狭いので、大きい声が出せないんですよ」

「花セラピー」とは、そして「花セラピスト」とは何か。大泉氏は「私達は、震災により、たくさんの方の事を知り、気づき、学んだようにおもいます。そして、『生きる』という原点を見させていただきました。花セラピストとして、この東北に、元気と笑顔を届けたい」（「国際花と緑のセラピー協議会」ホームページより引用）と述べている。大泉氏は花卉生産農家の長女として生まれ育ち、長じては生花店を営むようになった。そこへ発生した東日本大震災。「花」を軸としたボランティア活動を進め、人びととかがわる中で「復興」の課題を見出してきた大泉氏にとって、花セラピストとなることは必然の到達点だったといえるのかもしれない。

そのような大泉氏から参加者が実践的に学ぶことができたのが、研究会の後半のワークショップである。参加者は5名前後の小グループに分かれ、実際に花セラピーを体験した。まず、各自が気に入った色調の花束を選び、それをそれぞれのペースで生けていく。花を生ける上で決められた形式や手順はない。全くの自由である。その後、生け終わった花について、各グループ内で思いを述べ合い、全体でそれらを共有しながら、大泉氏がコメントを挟んでいくという形で会が進行した。

筆者も参加者にまじって花セラピーを体験させていただいた。生け花は初体験だったが、思いのほか集中している自分に気づき、驚いた。また、「自由に作り上げていく」という行為にしみじみとした喜びを感じた。グループ内での話し合いも楽しく、「癒やされた」「心落ち着いた」「普段の心の葛藤がリセットされた」といった、参加者それぞれの感想や生け花にこめた思いを聞くのは興味深かった。花セラピーの体験を通して、大泉氏の思いと経験が参加者達にも直接的な感覚となったことだろう。

今回、大泉氏をお招きしたのは、筆者が震災ボランティアとして、ご実家の片付けをお手伝いさせていただいたことがきっかけになった。研究会担当者としては、東日本大震災の被災地から遠く離れた熊本の地において、被災地の実際と現状、それにかかわる福祉、とりわけ被災者自身による「復興支援」の活動について当事者から直接学び、かつその活動内容を（いわば支援を受ける側として）体験できる機会として企画させていただいたのだが、参加者の反応を見るに、当初想定した以上の成果を上げることができたように思う。

今後も、大泉氏をはじめ被災地と連携した形での福祉研究の機会を提供していくこと、さらには、今回実施したようなワークショップ形式を含めた体験型での研究会企画を継続して検討していきたいと考えている。

（研究会報告担当者：藤本延啓）